

第2節 | ユダヤ教、語用、ジェンダー指標

アメリカのユダヤ教徒、その言語使用とジェンダー指標

前節までで見てきたように、社会言語学的なパターンのレベルで現れる男女差に関しては、①威信・権威・ステータス・アイデンティティなど、および、②権力と、他方、ジェンダーとの結びつきがその背景にあらうことは、研究者の間でそれほど異論はないように思われる。しかし、これらの変数間の重要性の違いや相互関係などについては諸説が提示されている。

たとえば、Romaine (1999: 175, 178) は、威信・アイデンティティや権力に関わるもののうち、特に教育とジェンダーの連関の重要性を——すなわち、女性が「育児の主要な責任者」と見なされている社会では、子どもの教育上の、ひいては社会経済的階層上の成功の機会や蓋然性を増やすため、社会階層の上層や教育の言語である標準語などの威信ある変種を、子どものケア提供者と目されている母親は使用するよう社会的に促されていることを——論じている¹⁷⁹。

そして、社会文化によってこれらの変数——権威や権力、ジェンダーや教育など——の有り様は異なるのだから、Silverstein (1985a) が注記しているように、当然、全ての社会文化で、古典的なラボヴィアンの調査が示したもの——女性による標準形使用への偏向と——同様のジェンダー差が見られるわけではない。リベラル進歩主義の傾向の強い Romaine (2003: 109) によれば、中東やアフリカなど、近代の非西洋社会文化の多くでは、女性たちは近代西洋社会文化におけるよりも、(標準語に見られるように、公式教育と書記とに結

179 女性を、「育児の主要な責任者」と見なす近代資本主義家父長制イデオロギーと類似した、女性を「(家庭で世代をとおして継承される)文化の守護者」と見なすイデオロギーについては本節(および次章の、モロッコの事例を扱う箇所)で後述する。

びついた) 顕在的威信の規範の所在から乖離しているとされている¹⁸⁰。加えて、ロメイン自身が調査した16世紀のスコットランドでのメアリー女王(在位、1542~1567年)へ向けた男女の手紙でも、低い社会的地位にある者たちとの結びつきが強い文物に見られる非標準的な諸特徴は、男性よりも女性の手紙に多く観察されたという。(同様の事例についてはRomaine (1999)、および下記参照。) また、キーナン(オックス)によるマラガシ語(マダガスカル)の研究では、男性の方が女性よりも丁寧にしゃべる規範が、この社会には見られることが示されている(小山・榎本、2022b)。同様に、ジェーン・ヒルのナワトル語(メキシコ)の研究では、女性は、男性によって威信のある規範的な言語使用と見なされているもの(特定の強勢の型や所有構文)を用いない傾向を示すといったパターンが、言語の規範とジェンダーとの間に観察されることが明らかにされている(Keating, 1998: 124)。

加えて、特に言語人類学の文献が明瞭に示しているように、そもそも標準語が存在しない社会、つまり標準語化とは異なった儀礼的な中心をとおして秩序化を蒙っている社会文化が数多、観察されている。(上記のマラガシの例など、そのいくつかの事例についてはSilverstein (2000: 137)を参照。) さらに、標準化され(ポスト)産業化された社会の中でさえ、①言語使用と社会の相関にはジェンダー以外にも、エスニシティや宗教などの変数が関与して女性による標準形の使用を抑止するような規範が働いているため(下記参照)——あるいは、②上でも見たように、主流社会、学校システムやその中産階級的規範に対する志向性の違いなどといった社会文化的な変数が関与し、同一ジェンダー内にもさまざまな集団や集団間の対立などが存在するため——全ての女性が古典的なラボヴィアの調査が示唆するようなパターンを示すわけでは全くない(Eckert, 1988, 1989; Wolfram and Schilling-Estes, 2006 [1998]: 237-245; Mendoza-Denton, 2008)。

以下、これらの事柄に関する事例を二、三、挙げておこう。たとえば、ミシガン州のグランド・ラピッズ(Grand Rapids)では、非ユダヤ教徒の住民は、

180 アラビア語圏に見られる、そのようなジェンダー偏差に関しては次章で詳細に論じる。

She is over there. の下線部sを [z] (標準形) と発音する一方、ユダヤ教徒は [s] (語末で無声化する非標準形) と発音することが時にある。男性のユダヤ教徒は女性のユダヤ教徒よりも [z] を使う比率が高く、特に社会的、あるいは政治的にこの町のコミュニティに溶け込んで(「社会統合」されて) いればいるほど [s] を用いないというパターンを示す。他方、ユダヤ教徒の女性たちは逆に、このコミュニティに溶け込んでいればいるほど [s] (非標準形) を使うことが観察されている。

その理由は、ここではユダヤ教徒の女性は、ユダヤ教の慣習・信仰の護持に対して責任を負う者の役割を課されており、無声音化 ([s]) はユダヤ教徒の振る舞いの象徴(ステレオタイプ)と見なされているため、彼女たちは、このステレオタイプを使って、ユダヤ教徒(の宗教的アイデンティティの護持を担う者)として、自己をキリスト教徒のような異教徒たちから異化する必要があるからだという(Lippi-Green, 1997: 31-32)。ここにも見られるように、エスニシティや宗教などに関わる特定の共同体のジェンダー役割などにより、女性の発話と標準変種との関係は変異を示し、女性たちが男性よりも常に標準形を多く使うとは限らないのである。

(また、以上のような事例は、潜在的威信を示す変種(低位変種)が、「標準語」など高位変種の対極にあるものと位置づけられると同時に、低位変種の中で最も高位変種から区別可能なものなどが、低位変種の中の「標準変種」になる、という過程の存在を示唆することに注意したい(Bhatia and Ritchie, 2004b: 802)。このようにして、標準変種は高位変種だけでなく低位変種にも現れえ、高位変種と標準変種とを単純に同一視するような、スタイルの一次元的な解釈には限界があることが示される¹⁸¹。)

他方で、アメリカ合衆国の全てのユダヤ教徒がこのようなジェンダーと言語使用の相関を示すわけでは当然ない。たとえば、Ahearn (2012: 60-61) によれば、ブルックリンのボローパーク(Boro Park)の(超正統主義)ハシド派系ユダヤ教徒の共同体では、男性は祈祷やユダヤ教の教典の読解に集中するように期待

181 「スタイル」についての詳細は小山(2022c)を参照。